



令和元年度 苫小牧市非核平和事業

# 平和の翼

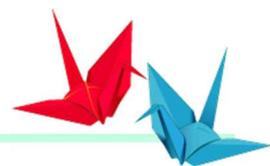
苫小牧市中学生広島派遣事業体験感想文集

苫小牧市政策推進課

## 目次

◆	中学生広島派遣事業を終えて「苫小牧市職員 根田 笑里」	▶	1
◆	青翔中学校 3年 柴田 佳和	▶	3
◆	ウトナイ中学校 3年 蛭子 力翔	▶	5
◆	苫小牧東中学校 2年 高木 緒珠	▶	8
◆	開成中学校 3年 鈴木 瑠菜	▶	10
◆	明野中学校 3年 中島 龍臣	▶	12
◆	事業の様子	▶	15
◆	苫小牧市非核平和都市条例条文	▶	21

## 令和元年度 中学生広島派遣事業を終えて



苫小牧市総合政策部政策推進課

主事 根田 笑里

本事業は、次代を担う子どもたちが被爆地である広島を訪問し、戦争と平和に対する意識を高め、広く市民に平和の尊さを考える機会を設けることを目的に実施している事業で、平成7年から行われています。今年で25回目を迎え、派遣された人数は今回の派遣者を加え130名となりました。

今年度の派遣事業は、7月22日に事前学習、7月26日に市長表敬を終えて、7月29日から31日までの3日間の日程で行いました。

研修初日は、早朝に苫小牧市役所を出発し、新千歳空港から羽田空港、羽田空港から広島空港へ乗り継ぎ、広島市内へ。平和記念公園を散策し、最初の研修場所となる平和記念資料館へ向かいました。

資料館東館の導入展示から渡り廊下を通じ、4月25日にリニューアルオープンしたばかりの本館へ入ると空気が一瞬にして変わったように感じました。本館では4つのテーマで展示を行っており、写真、絵画、遺品などたくさんの展示品があります。見学している最中、中高生の団体が「怖い」と言いながら足早に次の展示スペースへ向かっていくのを見ました。館内の照明が暗い中の展示でしたのでそうなるのも無理ないなと思いましたが、派遣者たちはじっくりと見学していました。

見学を終えた後は“豊永 恵三郎”さんによる被爆体験講話を聞きました。豊永さんは原爆投下当時、爆心地から10km離れた地点にいたためやけどなど直接的な被害はなかったそうですが、翌日以降広島にいた母親と6つ離れた弟を探しに入った際、残留放射線により被爆したそうです。現在も後遺症と向

き合い、被爆体験を語り継ぐ活動をされていて、当時、目にしたものや暮らしなど、資料館の展示だけでは想像できないこととお話しいただき、派遣者にとってとてもよい機会だったのではないかと思います。

研修2日目は、平和記念公園内にある原爆の子の像へ、市民のみなさまや派

遣者の中学校生徒さんに思いを込めて折ってもらった千羽鶴を奉納してきました。

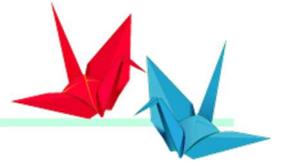
その後本川小学校へ向かい、ガイドの“岩田 美穂”さんのお話を聞きながら本川小学校平和資料館を見学



しました。本川小学校は被爆した校舎の一部を資料館として保存しています。岩田さん自身も卒業生で、被爆した母親の被爆体験を語り継いでいます。原爆が落とされた背景や母親の友人の話、グラウンドで遺体を焼いてそれが当たり前であったことなど、とても分かりやすくお話してくださいました。

梅雨明けの広島は苫小牧と違い非常に蒸し暑く体力を消耗しましたが、無事3日間の研修を終えることができました。研修の目的は平和について学び伝えることですが、派遣者たちはそれ以外のことも多く学び有意義な研修になりました。それぞれ感じたことを少しでも多くの人に伝えてほしいと思います。

最後に、今回の広島派遣事業を実施するに当たり、御理解と御協力をいただいた皆様にこの場をお借りして感謝申し上げます。



苫小牧市非核平和条例に基づいた活動の一環である、苫小牧市中学生広島派遣事業の派遣者の一員として、令和元年7月29日に広島を訪問しました。

教科書で第二次世界大戦について学んでおり、この戦争について知っているつもりになっていましたが、原子爆弾の被害を受けた広島で実際に見て学び、教科書では得られない貴重な体験をすることができました。

初めに、本年度リニューアルされた平和記念資料館で、被爆者の遺品や被爆の惨状を示す写真や絵などの展示を見学しました。

資料館ではまず、1945年8月6日の広島市の街地の白いジオラマに原爆投下時のCG映像を投影し、街が破壊される様子を再現するホワイトパノラマを見ました。朝の平和な広島に上空のB-29から投下される原爆。その原爆が広島に暮らしていた人々の頭上で突然爆発し、台風よりも桁違いに激しい爆風と、人体を一瞬で黒焦げにしてしまう熱線によって廃墟と化した街並みを目の当たりにして、強い衝撃を受けました。あの8月6日の朝、平和だった広島の名前はもうどこにも見られません。ただがれきの山だけがそこに広がっていました。原爆がこれほどの被害をもたらすものだと知り、パノラマの前でただただ恐ろしく感じたのを覚えています。

その後、原爆を体験した語り部の豊永さんのお話を聞きました。豊永さんは当時9歳。広島で、お母さんと幼い弟との三人暮らしをしていましたが、原爆が投下された8月6日の朝、豊永さん自身は通院のため爆心地から10キロメートル離れた隣町にいて、直接熱線や爆風の被害を受けることはありませんでした。爆心地の近くにいるはずのお母さんと幼い弟が心配で、駅で広島市方面行



きの電車を待っていると、広島市からの電車がやって来ました。そこに乗っていた人は、髪は焼け焦げてちりちりで、顔はやけどで元の大きさの二倍にまで膨れ上がっていました。さらに、手の先から肩や腕の皮膚が垂れ下がり、電車から出てくる人が恐ろしくて怖くてたまらなかったそうです。

爆心地の近くに居た豊永さんのお母さんと弟は危ないと思った瞬間に伏せて



弟の上に被さりました。弟はけが一つありませんでしたが、お母さんは腕の一部と顔の全体に熱線を受け、ひどいやけどを負い、豊永さんが再会したときには顔がぱんぱんに腫れ上がっていたと聞きました。

私たちの世代はこの戦争という出来事を体験することなく平和に生きてきました。そのため、悲惨な戦争という出来事に対して曖昧な認識しか持つことのできない人が多く居ると思います。当時わずか9才だった豊永さんが体験したこのような恐ろしい出来事はもう二度と起こしてはならないという決意を新たにしました。そのために、広島の方々から受け継いだ平和のバトンを多くの人へ繋いでいきたいと思っています。



1945年8月6日午前8時15分。平穩に暮らしていた朝、1つの原子爆弾が落とされました。当時9歳だった豊永さんは右耳が悪く、爆心地から約10km離れた病院へ通っていました。その時、背中からすごく大きな音、すごい爆風がありましたが怪我はなかったそうです。しかし広島にいる家族のことが気になりすぐに帰りたい気持ちでいっぱいでしたがいくら待っても列車は来ません。やっと来たと思えば広島からの列車で、その列車に乗っていた人のことを豊永さんは、「髪がチリチリで、衣服はボロボロ。顔はやけどしていて、手から肩や腕の皮膚がダラダラと垂れていて怖かった」と話していました。2日かかりで家族を見つけましたが、母は顔にやけどを負ってパンパンに腫れていて、服はボロボロの状態だったといいます。避難場所となっていたその場所はあちこちから「イタイイタイ」の声がしたそうです。弟には外傷はありませんでしたが、原子爆弾の被害の一つ「放射線」は防げず、病気になりました。ですが、近所の方々が食べ物などを恵んでもらうなど助けてくれました。当時自分1人や家族のことで精一杯だったのに自分たちは恵まれていると話していました。講話の最後には「日本は「唯一の被爆国」と呼ばれるのはそれはおかしい」と言います。それは当時広島には、日本人だけがいたわけではありません。植民地支配されていた朝鮮などの海外の方々も広島にいました。だから「唯一の被爆国」と呼ばれるのはどうなのかと、話していました。皆さんはどう考えますか。私はそのことを聞いて、日本という土地は被爆したが日本人だけが被害を受けたわけではないから考えるべきことだと思いました。



広島平和資料館では、黒く焼け焦げた三輪車や、ボロボロになった服、放射線による被害を受けて亡くなった方の最後の言葉など、深く見るほど悲しくな

る資料があり、これは写真に収めていいものかと躊躇してしまいました。本当にこれが日本で起こったことなのかと目を疑うようなものばかりで、その中でも、6人の1945年8月6日の生活からその後のことまでが記されていた資料は、原子爆弾の恐ろしさや戦争の悲惨さについて深く考えさせられるものでした。

爆心地から約350mの至近距離にあった本川小学校は、鉄筋コンクリート3階建ての建物でしたが、原子爆弾の「熱線」と「熱風」の被害を受け、校舎はボロボロになりながらも現在も形をとどめています。その校舎は被爆したそのままの状態に残されてあったので、被害の大きさがひしひしと

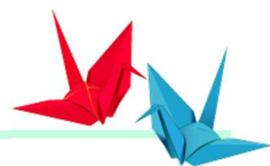


伝わってきました。そこでガイドをしてくれた岩田さんは、母が被爆した被爆二世です。岩田さんは母が話していたことをこう伝えています。「本川小学校は被爆してでも建物が崩れなかったためすぐに臨時救護所となりましたが、薬も少なく重傷者の方から亡くなっていくいっぽうでした。その遺体を校庭に約50cmの穴をあけてるところで焼いていたため、今でも校庭を掘るとたくさんの遺骨が出る」と言っていました。ここの資料館でも原爆の怖さが1つの資料によって伝わってきました。それは、液体が入ったまま溶けて形が変わったガラス瓶です。これを見て一瞬にして多くの罪のない人の命を奪ったことのほかにも、怒りや悲しみが交わるような気持ちになりました。

今回の研修を経て戦争は日本だけでなく世界のどこでもしてはいけないのだ、と改めて思うことが出来ました。あの日から74年たった日本は、平和が続いています。それはあってはならないことを1人1人が認識しているからだと思います。しかし、世界には約2万の核兵器があります。核兵器をゼロにするために、世界のみんなが平等に平和に暮らせるためにも、広島からもら

った「平和のバトン」。これを次世代へと渡していくべきなのではないでしょうか。こんなに悲しくつらい戦争を2度と起こさないためにも僕は「平和のバトン」を渡し続けていきたいです。





1945年8月6日 8時15分。青空で太陽が照り付けていた広島は、一つの原子爆弾で炎に包まれ、14万人もの命を奪いました。この悲惨さを体験していない私は、その当時の広島の様子や光景を自分の目で見て、戦争についての知識を広げていきたいと思い、この事業に参加しました。



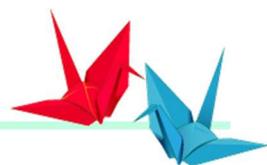
研修1日目は平和記念公園、原爆ドームの散策と、平和記念資料館を見学しました。写真でしか見ることのできなかつた原爆ドームは、鉄骨が見え建物だとは思えない悲惨な姿となっていました。資料館では、語り部の豊永さんから、原爆が投下された時の話を聞きました。豊永さんが当時9才のとき、耳の聞こえが悪く10キロメートル離れた病院に行っているときに広島に原子爆弾が投下されました。10キロ離れた所でさえ、強い爆風が押し寄せたそうです。ふと後ろをふり返ると、大きなきのこ雲が上がり、家族の心配とアメリカやイギリスへの怒りがこみあげてきたそうです。家に帰ろうと列車をまわっていると何時間もたってきてからきました。列車からおりた人は髪が焼けてチリチリになり、服はボロボロで顔はまっくろに焼け、男女の区別がつかなく、とても怖かったと語っていました。そのようなことはおこってはいけないと、今現在、支援活動や今回のように今ではごくわずかな語り部として、未来が平和になるための活動をしているそうです。豊永さんの講話は資料館で見てきたものをもっと細かく豊永さんの体験と照らし合わせて話してくれたので、とてもわかりやすく、様々な視点から戦争について知ることができました。

研修2日目は、爆心地から350メートル離れたところにある、本川小学校を訪問しました。本川小学校ではガイドの岩田さんから母親が経験したお話を聞きました。本川小学校には地下があり、地下は原爆をうけたそのままの姿が残っていました。原爆が投下された時、本川小学校は丈夫だったためボロボロではあるが、形は残りました。そこは救護所として、たくさんの人々が集まり

ました。しかし重傷者が多く、そのころは薬があまりないので、亡くなる人が多かったそうです。現在のように火葬する場所がなかったため、死者はグラウンドにほった穴に入れ、次々と焼いていきました。そのようなことを一ヶ月近く行っていたそうです。そして、新しい校舎の建てかえのとき、グラウンドをほりおこした際、遺骨や焼けこげていた遺体などが100メートルにもおよぶ深さで発見されました。その話を聞いたとき、とても心が苦しくなり悲しくなりました。また、戦争について経験した人が少なくなっているからこそ、自分たちが「忘れてはいけない戦争のつらさ」を今後平和ということを守り続けなければいけない現在の人々に伝えていかなければならないと強く語っていました。



今回の事業で知ることのできた戦争の恐ろしさを経験していない人々に自分が先頭にたって伝えていきたいです。また、今ある日本の平和は「あたりまえではない」「戦争はいつでも隣り合わせ」ということを心に思いながら、今の日本よりももっと平和な世の中を築き上げていきたいです。平和は待っていてもきません。自分たちが作りあげていかなければなりません。そのことを現代の人々が少しでもわかってほしいです。今回、うけつがれた「平和のバトン」を一人でも多くつなげていき、平和への意識を高め、もう二度と戦争を繰り返さない世の中をつくっていきたいです。



1945年8月6日午前8時15分。

たった一つの原子爆弾により、美しい広島街は一瞬で地獄と化しました。沖縄で一度語り部の方のお話を聞いていた私は、原子爆弾の恐ろしさを身近に感じたいと思い、今回の中学生広島派遣事業に参加し、その一員として貴重な体験をさせていただきました。

研修1日目は、平和記念公園・原爆ドーム散策の後、平和記念資料館を見学しました。広島に到着した時、天気も良く街がきれいで、当時の人達もこの空を見ていたのかなと思い、今見ているような景色が人間によって破壊されると思うと少し悲しくなりました。

資料館では、縮小された原子爆弾の模型などが展示してありました。私は、原爆の大きさにとても衝撃を受けました。展示してある大きさを本物だと想像していましたが、そこには、「実際の大きさは模型の8倍」と書いてあったと記憶しています。約3メートルもの大きさになるそうです。人間よりも大きな原子爆弾。なぜそのような物を作るのでしょうか。



資料館見学後、語り部の豊永恵三郎さんからお話を聞きました。当時9歳の豊永さんは耳が悪かったらしく、爆心地から10キロメートル離れた病院へ通いに行っていたようで、怪我はなかったそうです。背後から大きな音がして、「広島に新型の爆弾が落とされた」と聞いたそうです。当時3歳の弟と母は建物疎開のため今の平和記念公園に集合していたそうです。そこには、仕事の為集められた中学校1・2年生がたくさん居たそうで、木陰がなくみんなが爆風と熱線、放射線を一斉に受けたそうです。家族さがしのため広島駅へ行く列車を待っていると、顔がやけどによって目や鼻があるかわからない人、両手を前に出して垂らし、自分の皮膚が真っ黒く指先から垂れ下がってだらだら出て来るのを見て、とても怖かったと話していました。

資料館には原爆の他にも、さびついた自転車やボロボロになったモンペ服などがあり、自分のカメラに収めようとは考えられませんでした。館内では、ほとんど誰も言葉を発しないような空気に包まれていました。

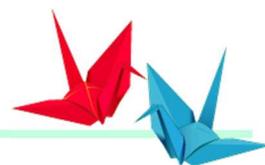
研修2日目は、被爆二世の岩田さんにお話を聞きました。ガラス瓶に液体が入っていて、蓋の部分が溶けて固まっているため開けることができなく、岩田さんがショーケースを揺らすと中の液体が波を打ちながら揺れ、当時生きていた液体が今でも残っている事に驚きながら、



実際に広島に原爆が落とされた事を確認させられるようなもので、何も言えませんでした。他にも、本川小学校の近くに建てられていた柱が保存されていて衝撃を受けました。救護所として使われていた本川小学校では、一ヶ月ほど朝から夜まで、グラウンドに大きな穴を掘った所に死者を置いて火をつけ、石

灰をまいて……。という作業が続けられたそうです。そのため建てかえの際には、遺体が焼けている黒色と石灰の白色がとても深いところまで発見されたそうです。今でも、本川小学校のグラウンドを掘ると遺骨が出てきたりするそうで、児童が発見したこともあるそうです。

この戦争は、教科書だけではわからない程の恐ろしさがあり、二度と繰り返してはいけないものだと思います。「戦争は昔のもの」と考える人もいるかもしれませんが、戦争を未来で起こさないために今の私たちが努力を続けていくことが、日本や世界の平和につながるのだと思いました。広島の方々から手渡された「平和のバトン」をできるだけ多くの人につなぎ、広めていきたいです。



今年で25回目となる広島派遣事業が7月29日～31日まで行われました。実際に広島の地に赴き、自分の肌で戦争の惨禍に触れることで、モノクロだった「戦争」という世界が、自分の中で徐々に着色されていきました。ここでは、紙面をお借りして本事業において私が学び体得したことを紹介したいと思います。



1945年8月6日午前8時15分。今となんら変わらぬ日常が一瞬にして破壊される出来事が起こりました。それは、広島への原爆投下。大きく立ち上がる黒煙の下で、多くの人々が変わり果てた広島をひたすら逃げまどいました。過去に前例のない出来事によりもたらされた体と心の傷。体の傷によって犠牲になった人々……。そして今もなお心の傷で苦悩を抱える被爆者の方……。どちらにしても簡単に癒えることのない傷は私の想像を絶するものでした。

先日、74回目となる広島原爆の日を迎えました。場所は平和記念公園。多くの人々が戦争という過ちを二度と起こさないという決意と鎮魂の祈りを捧げました。私はこの一週間ほど前、平和記念資料館で写真や展示物から戦争の恐ろしさや人々の悲しみを学び、語り部である豊永恵三郎さんの講話を聴かせていただきました。豊永さんは当時、お母さんと弟の3人家族だったといいます。あの朝は通院するため、爆心地から約10km離れた場所で原子爆弾投下によるきのこ雲を見たそうです。家族が不安で広島街へ戻ろうとした豊永さんは、皮膚が焼けただけ、逃げまどう人々が視界に入り、恐怖を覚える中家族を探しました。建物疎開の参加者として原爆ドームの近くに集合していた豊永さんのお母さんと、幼い弟。途方に暮れながら探し続け、やっと家族が再開できた時、お母さんは体に深い傷を負っ

ており、幼い弟は数日後に被爆による体の異変が襲ったそうです。最終的には、家族3人、命の灯を切らすことはなかったそうです。私には、豊永さんの話が、まるで、自分の眼前で起きていることのように聞こえてきた、そんな時間でした。罪のない多くの人を苦しめる結果となる戦争という悲劇を起こしてはならないということと共に、命の尊さを考えさせられました。

2日目の研修先である本川小学校では、慰霊碑に献花し、一人一人が犠牲になった人々へ思いを馳せました。その後、ガイドの岩田美穂さんのお話を聞きながら資料館内を見学しました。当時の街の様子や土地の利用の仕方【犠牲者の火葬など】、ご自身のお母さんの話を、被爆二世の立場でしてくれました。実際にほぼ当時のまま残っている建物の中で戦争の惨禍を身に染みて感じたことは、自分にとって貴重な経験となり、心の中で「苦小牧の人々にこの思い、そして、戦争という姿を伝えなくては。」という明確な思いになりました。



私たちは、苦小牧市内の中学生代表として広島で学習しました。しかし、平和記念公園に奉納された千羽鶴には、多くの市民の方々の思いが乗せられています。千羽鶴を作成するという形で、平和に対して思いを巡らせてくださった方々に感謝申し上げます。また、本事業により私たちが学んだことは、私たち自身の口によって伝えていきたいと思えます。その話が、皆さんの心に具体的なメッセージとして残ると幸いと存じます。

もうすでに、平和のリレーは74年間続いています。また新たに広島の方から受け継いだ平和のバトン。このバトンの色があせようとも、私たちは繋ぎ続け、平和のリレーを完結させることはありません。私は、この重みのあるバト

ンを持ち、ただ無感情で走るのではなく、「平和な未来を切り拓くのは自分である。」「平和の意味と存在意義は何か。」ということを考えながら走らなければならないと思います。想像してみてください。自分の明日を。その明日に、戦争は起きていますか。誰もが自分の明日に戦争はないはず。それは平和な社会が自分のまわりを包んでいるからではないでしょうか。その平和を永遠のものできるように、今回の研修の話をもっと多くの人に伝えていきたいと思えます。目に見えない重みのあるバトンと共に・・・。



# 事業の様子

令和元年 7月 22日 (月) オリエンテーション・事前学習

研修当日の役割分担やスケジュール、注意事項を確認し本番への準備を行いました。

その後、事前学習として原子爆弾投下後の広島を鑑賞し、研修本番に向けて平和学習をしました。

令和元年 7月 26日 (金) 市長表敬



オリエンテーション・事前学習を終え、広島派遣者で市長表敬を行いました。

それぞれ自己紹介を行い、研修に対する意気込みや研修に参加した動機を語り、岩倉市長から激励の言葉をいただきました。

6月1日～14日まで設置していた、折り鶴コーナーにより、今年度も市民の皆さんからたくさんの折り鶴をいただきました。

集まった折り鶴を在宅型有料老人ホーム「花みずき」のみなさんに千羽鶴にしていただきました。

御協力ありがとうございました。



令和元年7月29日(月)～31日(水) 本研修

《1日目》7月29日(月)

\*広島平和記念資料館見学

語り部・豊永恵三郎さんによる被爆体験講話を受講

《2日目》7月30日(火)

\*広島平和記念公園内「原爆の子の像」へ千羽鶴を奉納

\*本川小学校平和資料館慰霊碑へ献花

ガイドの岩田美穂さんによる解説と見学

\*世界遺産「厳島神社」見学

《3日目》7月31日(水)

\*帰苦



広島平和記念資料館見学、豊永恵三郎さんによる被爆体験講話

1945年(昭和20年)8月6日午前8時15分。広島に世界で初めて原子爆弾が投下され、その年の12月末までに約14万人の人々が亡くなりました。広島平和記念資料館は被爆の実情を伝え、核兵器のない平和な世界の実現へ貢献するため設置されました。資料館では黒こげになった弁当箱、当時の光景を描いた絵、高熱でとけたガラス瓶、被爆した方の遺品の数々などの被爆資料を展示しています。

資料館見学後には、語り部の豊永恵三郎さんから被爆体験についてお話をしていただきました。

▼語り部の豊永さんと



▼平和記念資料館を見学する様子



## 平和記念公園、本川小学校平和資料館

### 【平和記念公園】

派遣者の在籍する各中学校の生徒が作成した千羽鶴と、苫小牧市民の皆さんから寄せられた折り鶴で作成した千羽鶴を『原爆の子の像』へ捧げました。



### 【本川小学校】

本川小学校は爆心地から350メートル離れたところにあり、原爆によって約400人の児童と校長先生のほか10人の教師が一瞬にして命をうばわれました。

この平和資料館は、昭和3年に広島で初めて建てられた鉄筋3階建ての校舎の一部で、被害を受けた状態をそのまま残し、被爆の「証」として保存されています。展示されている写真や遺物には、多くの人々の悲しみや願いが込められています。

ガイドの岩田美穂さんから岩田さんの母親が体験したお話や当時から現在までの小学校の様子をお話いただきました。



▲本川小学校資料館を見学



▲慰霊碑へ献花している様子

## 令和元年8月15日（木） 苫小牧市平和祈念式典

終戦の日に行われた平和祈念式典では、柴田くんが派遣者を代表して広島派遣の体験感想文を發表し、派遣者全員で平和の誓いを朗読しました。



▲「平和の誓い」を朗読する様子

▼体験感想文を読む柴田さん



### 『平和の誓い』

今から74年前の1945年8月6日、今日と変わらぬ日常を一瞬にして破壊する出来事が起きました。

広島は炎と黒煙に包まれ、その下で多くの人々が苦しみながら変わり果てた地をたださまよい歩きました。

原子爆弾が投下されたあの日の悲しみや苦しみに学び、去る「平成」という時代の日本は平和を保ち続けることが出来ました。

そして時代は「令和」となりました。この時代の平和を作り上げるのは自分たち自身であり、後世に戦争の悲惨さを伝えると共に、戦争に対する正しい認識を持つことが、未来を切り開くことであると今回の研修で学びました。

近年、戦争を実際に経験した人は減少する一方、平和について考えようと、次の時代を担う人たちが、悲惨な出来事から平和を学ぶために行動しています。

今回の研修で、また新たに広島の方々から受け継いだ「平和のバトン」。

このバトンの色があせようとも、私たちはこのバトンをより多くの人に繋いでいかななくてはなりません。

数多くの罪のない命が奪われる戦争は、もう二度と起こしてはいけません。

私たちはこのような強い意志と、平和な社会を作り上げる責任をもち、力の限り「平和のバトン」を繋いでいくことを誓います。

## 事後研修～各中学校での体験発表～

▼苦小牧東中学校 高木 緒珠さん



▼明野中学校 中島 龍臣さん



▲青翔中学校 柴田 佳和さん▶

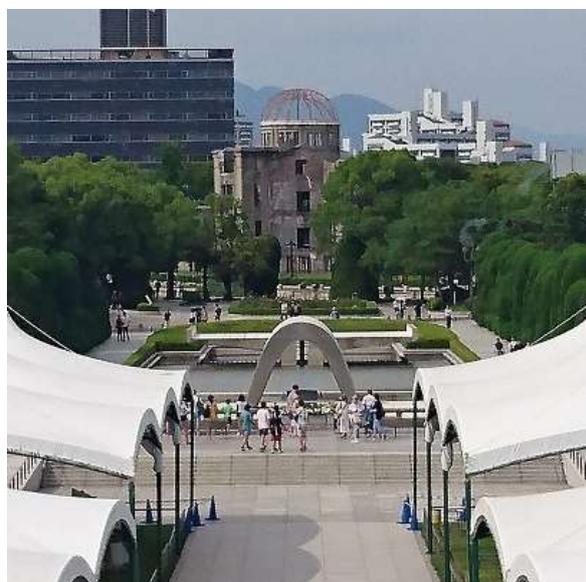


広島派遣事業の事後研修として各中学校で派遣者による体験発表を行いました。実際に被爆地に行き、感じた事や見たものを他の生徒達にも伝え、平和について考えてもらう時間を設けました。それを聞いた皆さんは、家族や友人に伝え、一人でも多くの市民の方々に広がることを願っています。協力していただいた各中学校の皆様ありがとうございました。

## その他 本研修の様子



▲平和記念資料館のタッチパネル型情報端末「メディアテーブル」。  
戦争時から復興後の広島についての資料を検索し、学ぶことができます。派遣者たちは真剣に資料を読み込んでいました。



▲資料館本館からの景色

本館の展示場を抜けると、戦没者慰霊碑と原爆ドームを一望できる場所がありました。平和記念公園では平和祈念式典の準備をしていました。



▲平和記念公園の「原爆の子の像」。  
2歳の時に被爆した佐々木貞子さんが、10年後に白血病で亡くなったことをきっかけに、同級生たちが慰霊碑をつくろうと呼びかけ、昭和33年に完成しました。



▲平和記念公園の「平和の鐘」  
鐘の音を広島から世界へ響きわたらせ、全人類の心に平和をしみわたらせることを願いながら、派遣者全員で鐘を鳴らしました。

## 苫小牧市非核平和都市条例

わたしたち苫小牧市民は、安全で健やかに心ゆたかに生きられるように、平和を愛するすべての国の人々と共に、日本国憲法の基本理念である恒久平和の実現に努めるとともに、国是である非核三原則の趣旨を踏まえ核兵器のない平和の実現に努力していくことを決意し、この条例を制定する。

### (目 的)

**第1条** この条例は、本市の平和行政に関する基本的事項を定め、市民が安全で健やかに心ゆたかに生活できる環境を確保し、もって市民生活の向上に資することを目的とする。

### (恒久平和の意義等の普及)

**第2条** 市は、日本国憲法に規定する恒久平和の意義及び国是である非核三原則の趣旨について、広く市民に普及するように努めるものとする。

### (平和に関する交流の推進)

**第3条** 市は、他の都市との平和に関する交流を推進するように努めるものとする。

### (その他平和に関する事業の推進)

**第4条** 市は、前2条に定めるもののほか、平和の推進に資すると認める事業を行うように努めるものとする。

### (平和の維持に係る協議等)

**第5条** 市長は、本市において、国是である非核三原則の趣旨が損なわれるおそれがあると認める事由が生じた場合は、関係機関に対し協議を求めるとともに、必要と認めるときは、適切な措置を講じるよう要請するものとする。

### (核兵器の実験等に対する反対の表明)

**第6条** 市長は、核兵器の実験等が行われた場合は、関係機関に対し、当該実験等に対する反対の旨の意見を表明するものとする。

### (委 任)

**第7条** この条例の施行に関し必要な事項は、市長が定める。

### 附 則

この条例は、公布の日から施行する。

(平成14年4月1日公布)



## 【 発 行 】

### 苫小牧市総合政策部政策推進課

所在地：〒053-8722 苫小牧市旭町4丁目5番6号

電 話：0144-32-6039 FAX：0144-34-7110

E-mail：seisaku@city.tomakomai.hokkaido.jp

(令和元年9月30日)